

特集 「TQM ツールボックス」 に あたって

益田 昭彦*

2年間にわたる本誌のシリーズ特集「マネジメントにおける質 (Quality) の変化・拡大—21世紀の管理技術の体系化をめざして」も本号でいよいよ大詰めを迎えることになった。

このような一貫性をもたせた特集では、全体を通してみたときに発信される基調メッセージがあって、読者がそれを容易にくみ取れなければ意味がない。

この特集では、冒頭の号 (VOL.30, NO.4) でシリーズのフレームワークとともに基調メッセージが明らかにされている。引き続きそれぞれの特集テーマでは、最新のトピックスを取り入れながらそれを敷衍し、マネジメントの質の新しい局面を論述し、有効な事例を紹介してきた。その底辺には管理技術の支えが常に存在していたことを見逃してはならない。

*

前世紀末の10年間に企業人、それも主に経営層から管理技術の無用論やそれに近い意見が輩出したことは、長引く景気の低迷へのあせりがあったにせよ大きな問題であった。なぜなら日本企業から管理技術にかかわる部門の縮小や廃止が同時進行していたからである。品質管理のダイナミズムの源泉であった継続的教育・訓練もそれに伴って縮小傾向を続けている。その結果がわが国産業の発展と活性化にとって禍となるか福となるかは今世紀に持ち越された。その様相の中でシック・シグマのようなツール教育を重視する手法が米国から輸入されたことは正に皮肉である。

*帝京科学大学 理工学部

連絡先：〒409-0913 山梨県北都留郡上野原町八ツ沢
2525 (連絡先)

しかしながら、当学会としても上記の意見に謙虚に耳を傾け、専門家として新しい方向性を示唆し導くことが義務であり責任と思われる。品質管理における企業人が苦肉の策の中から萌芽させたツールを、学際が取り上げて合理化し敷衍化するというサイクルは、QC ツールの成立にかかわる有効な産学協同であり、わが国が世界から品質によって賞賛を得た要因の一つになっていた。近年は環境変化のうねりに呑み込まれ、またIT (情報技術) の普及による多すぎる情報に埋もれて、砂の中から一粒の砂金を見いだすことが極めて困難になった。欧米を中心にツールの選択ガイド作成の活発な動きは、この状況変化に対する一つのソリューションであり、国際規格化が進められている分野も出ている。われわれも不易なものや流行なものを識別し、老朽化したツールに対しては環境の変化に合わせてリフォームしたり、再構築したり、思い切って廃棄したりする活動が必要であると思われる。

*

この号では、このような流れを踏まえて試みとして編集委員会で60のTQMツールを選び出し、それぞれの専門分野の研究者・技術者などに簡略なツール紹介をまとめてもらった。ツールの選定にあたった編集委員は専門として主要な業界や研究分野を網羅しているので、ほぼ公平な判断で行われたと考えてよいであろう。この号は、TQMのツールガイドにもなるもので、読者の座右に置いて利用されることを期待する。また、これを基に今回取り上げられなかった有効なTQMツールをさらに吟味し、追加していくことを期待するものである。